

十字架の叫びの意味

NTT-OB 福島 勲

キリストは私たちのために、ご自分のいのちを捨ててくださいました。
それによって私たちに愛が分かったのです。(Iヨハネ3:16)

「カルバリの十字架わがためなり」(聖歌399番)と救いを体験した時、ことばで言い表すことのできない喜びと感謝でいっぱいでした。

中学生の頃から、朝、目が覚めた時、フッとどうすることもできない心の空虚さと不安が襲って来ることがありました。時には、余りの空虚さに、死にたいと思ったこともありましたが、死後に対する底知れない不安に襲われました。

このような不安を忘れようとして、ラジオや映画や小説で紛らわせようとしていましたが、その不安は忘れた頃に繰り返しやって来ました。さらに自分の愚かさが原因で人間不信にも陥ってしまいました。誰にも相談できないで、孤立して生きていました。

昭和34年(1959年)、以前から志していた総合無線通信士を目指して、北海道の片田舎の漁村から上京しました。学生寮に入りましたが、そこにはクリスチャンの副舎監の先生が私の前の部屋におられました。私が入る少し前に来られたばかりだったそうです。神様は私のような者のためにそのような恩師を導いて下さっていたのでした。

その恩師を通して、バイブルクラスに参加するようになり、カナダ人宣教師に出会いました。そして1冊の新約聖書をいただきました。

少しずつ聖書を読むようになってから約3か月後の11月3日の夜、暖房もない寒い部屋で布団に入って聖書を読んでいた。マタイ福音書の後半から読んでいたのですが、不思議なお方に惹きつけられました。

そのお方は正しい方なのに、唾^{つば}をかけられ、拳^{こぶし}で殴られたり、葦^{あし}の棒でたたかれ、むち打られました。さらに、なんと十字架^{くぎつ}に釘付けにされたのです。

さて、十二時から午後三時まで闇が全地をおおった。三時ごろ、イエスは大声で叫ばれた。「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」

これは、「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。(マタイ27:45-46)

この聖句を読んだ時、真昼の明るい時間帯なのに、12時から3時まで闇におおわれ、十字架にかかって大声で叫んでいる光景がありありと見えてきました。

その時、神様の憐みで、十字架で苦しんでいるイエスというお方が自分のための身代わりになって死なれたことを悟らせられました。

また、それまで人には真面目そうに思われていましたが、罪深い不道德な人間であったことを走馬灯のように示されました。思わず「イエス様、ごめんなさい」と叫んでいました。

ほとんど同時に、神に愛され赦されている確信で、心は平安と喜びでいっぱいになりました。生まれて初めて嬉しくて眠れませんでした。当時の私には、上記の聖句がどのように深い意味があるのか知る術はありませんでした。

しかし今日、沢山の聖書注解書や聖書講解書があり、さらに電子版のJばいぶる（聖書翻訳比較、原語解析、語句検索、聖書注解、聖書辞典、キリスト教辞典、聖書地図等々／いのちのことば社）もあります。聖書をより深く学ぶことができます。それらの解説書を参考に代表的な聖句をピックアップしてまとめてみました。

神の御子が人となられる

天地万物の創造主なる神が人となられたとすると、それは栄光に輝く近づきたい存在であったであろうと勝手に思っていますが、聖書によれば、なんとも不思議な「苦難のしもべ」としての姿が記されています。

「悲しみの人で病を知っていた」(イザヤ53:3)

永遠の神の御子は、ほむべき三位一体の第2の《位格》ではありましたが、「悲しみの人」となり、「病を知って」いる者となりました。罪と死との領域の中にお入りになられたからです。御子は自発的に来られて、自ら低くなることを選び、自ら卑しくなられました。

「悲しみ」はヘブライ語マコーブ (מְכַאֵב、英訳= sorrows、pain) で、直訳では「痛み」とも訳せるそうです。

「痛みの人」とは、痛みに敏感な人との意味です。実際、イエスは完全な人間性を持っておられ、痛いものは痛いという感覚をお持ちでした。スーパーマンのように、苦痛を苦痛とも思わぬ人ではありません。私たちの悲しみ、痛みに対しても、「わたしは同じような痛みを経験したよ」と理解をされる救い主なのです。

御子はこの世界の中、この罪と死という別の領域の中にやって来られました。そして、ご自分を卑しくし、「女から生まれた者、また律法の下にある者」となるために、誘惑されることがありえる領域の中にお入りになられました。

「病」と訳されている言葉はヘブライ語チョリー (חֲלִי、英訳= sickness、weakness) で、肉体的弱さのことです。

「病を知る」とは、「病に対して同情的理解がある」という意味です。私たちの弱さを経験的に知られるお方となるために、ご自分も弱さの中に身を置かれました。

主イエスが「悲しみの人」「痛みの人」である、と言う意味は、神としてのご性質を持っておられましたが、同時に人間としての性質を持ち、私たちの弱さや苦しさを経験して、理解してくださる方でもありました。

主は、ご自身が試みを受けて苦しまれたので、試みられている者たちを助けることができになるのです。(ヘブル2:18)

私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯されませんでした。すべての点で、私たちと同じように、試みに会われたのです。(ヘブル4:15)

同じ目線で物を見、同じ肉体で苦しみや痛みを経験されたものだけが、理解し、励ますことができます。子どもを亡くして悲嘆にくれている母親に、私も子どもを亡くしました、という一言が、どんなに大きな励ましとなることでしょうか。

「私たちの病^{やまい}を負った」(イザヤ53:4)

夕方になると、人々は悪霊につかれた者を、大勢みもとに連れて来た。イエスはことばをもって悪霊どもを追い出し、病^{やまい}気の人々をみな癒やされた。

これは、預言者イザヤを通して語られたことが成就するためであった。『彼が私たちのわずらいを担い、私たちの病^{やまい}を負った。』(マタイ8:16-17)

イエスは、癒しのわざを沢山なさいましたが、それは御言葉だけでなく、身を削るようなエネルギーで、他人の病^{やまい}を身に負うことによってなされたのです。自分の魂にも肉体にも何の影響も受けなくて、なされたものではありません。

イエスは涙を流された(ヨハネ11:35)

イエスが格別に愛された家族の一人であるラザロが死に、その墓に行き、嘆いている家族を見た時に、もらい泣きなされたようです。もらい泣きというのは、その魂が柔らかくて、感じやすい方である徴です。

さらに、ヘブル人への手紙5章7-8節では、「キリストは、人としてこの世におられた時、自分を死から救うことのできる方に向かって、大きな叫び声と涙とをもって祈りと願いをささげ、そしてその敬虔のゆえに聞き入れられました。キリストは御子であられるのに、お受けになった多くの苦しみによって従順を学び」とあります。神の御子はもはや栄光の領域の中におられず、人間となり、「イエス」となった上で、この罪という別の領域の中に入っておられました。

ゲッセマネの園で

さらに、ゲッセマネの園におけるイエスを眺めたい。苦悶とうめきが、いやまして激しく見られます。その激しさのあまり、汗が血のしずくのように落ち始めるほどでした(ルカ22:44参照)。

イエスの魂と霊の苦悶があまりにも大きかったために、汗が血のしずくのように流れ始めたのです。御子は永遠の昔から御父の心におられたお方です。



御父と御子と聖霊は共に同等であり、共に永遠であり、何ら混じり合うことも、変化することも、移り行くこともありません。それが御子の永遠の状態でありました。しかし、御子はその外に出られたのです。

カルバリの十字架で

ここに主がお入りになったものの極限があります。《十字架》です。十字架上の主イエスを眺め、その叫びに耳を傾けたい。

わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか。
(マタイ27:46)

これが詩篇22篇の冒頭の言葉であるため、イエスはやがて賛美に至るこの詩篇全体を唱えていたとし、この叫びは見捨てられた苦悩ではなく賛美と信頼を表していると理解する学者もいます。

しかし、もしそうなら、福音書記者はこの詩篇に含まれる賛美の言葉を加えたのではないのでしょうか。やはり、神から見捨てられた者の叫びと見るほうが自然です。

天の父との親密な交わりの中にあつた御子が（マタイ11:27、ヨハネ10:30）そのように見捨てられたのは、神に対する人間の罪を負い、のろわれたものとなったからです（イザヤ53:6、Ⅱコリント5:21、ガラテヤ3:13）。

その短い時間、主は現実には父なる神から切り離された状況におられました。御子と御父の間に永遠に存在していた永遠の交わりは断絶し、そのすさまじい瞬間に、御子は神の愛の領域の外におられました。

「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」とイエスは言われました。それは自発的に罪と死との領域の中に入られたからです。それは、その束の間に、御子イエスが完全に神の領域から、また、ご自分の御父との交わりから断ち切られたことを意味しています。

上記のような学びを通して、主イエスが十字架上で叫ばれた御言葉の意味が少し分かったような気がします。なんとありがたいことでしょうか。

私たちが罪から贖うために、父なる神の御前に、完全で十分な贖いの代価としてご自身を差し出し、神の義のさばきを受けて下さったのです。私が受けるべき神の義の怒り・のろいを肩代わりして下さったのでした。

また父なる神も、岩淵まことさんの歌「父の涙」のフレーズのように、「…十字架から、あふれ流れる泉、それは父の涙…」とあるように、父なる神が愛する御子を犠牲にされる苦しみの涙でもあったことでしょう。

御父・御子・聖霊なる三位一体の神様のご計画・みわざ・みわざの適用の働きに、心から感謝と賛美をささげたいです。

